

# 古文字學研究文獻提要

前號では日本語による古文字學の入門書を紹介したが、今回は中國語による古文字學の概説書を紹介する。甲骨文・金文・戰國文字の專著各一件と、古文字學そのもの、あるいは古文字全體を扱った總論を三件取り上げる。

## 王宇信・楊升南主編『甲骨學一百年』（社會科學文獻出版社、一九九九年）

甲骨文發見百周年を記念して出版された、ほぼ百年近くの甲骨學を總括的に論じた七一七頁におよぶ大きな編纂物である。以下、本書の内容の概要を記す（章題の下の括弧内は執筆者）。

第一章「緒論」（王宇信）では、甲骨學とは甲骨文の考釋にとどまらず、古代社會・歴史・文化までをも研究する學問と捉える。また甲骨文という語は一九二一年に、甲骨學という語は一九三二年に初見し、比較的後起だということが記されている。

第二章「百年出土甲骨文述要」（孟世凱）は、殷滅亡後の殷墟甲骨の狀況に對する推測と、甲骨文發見から一九九一年の花園莊東出土甲骨に至るまでの殷墟甲骨の出土狀況や出土數を記している。

第三章「甲骨學研究基礎工作的不斷加強」（孟世凱）では、劉鶯『鐵

雲藏龜』（一九〇三年）に始まる甲骨文の著録書（資料集）や工具書（字書や索引などの參考書）が網羅的に紹介されている。とりわけ集大成的な著録書である『甲骨文合集』（一九七八〜八二年）の紹介に紙幅が割かれている。

第四章「甲骨文的考釋及其理論化」（宋鎮豪）では、孫詒讓『契文舉例』（一九〇四年）に始まる甲骨文考釋書が紹介されている。また、甲骨文を讀解・考釋する上での方法やその理論を記している。前章とあわせて、特に甲骨文讀解・考釋のための文獻目錄として有用なところがある。

第五章「甲骨文的分期斷代」（王宇信）では、殷墟甲骨文が殷王朝時代のものだと確認されるに至った經緯や、殷墟甲骨文の時代を五期に區分し斷代の基礎を確立した董作賓「甲骨文斷代研究例」（一九三三年）の概要、それに對する後の修正説といった、一九九七年ころまでの斷代研究に關する諸學説がまとめられており、斷代研究史の概略を知る上での良い手引きになっている。

第六章「甲骨占卜和卜辭文例文法（上）」（宋鎮豪）では、甲骨材料の來源とその入手から加工、實際の占いの仕方、占卜後の處理といった殷代における占卜行爲の次第、正反兩貞・同事異問・一事多貞など

卜辭から窺える殷王朝の占卜制度、殷墟期以前の新石器時代から青銅器時代早期に出土した甲骨の事例が記されている。

第七章「甲骨占卜と卜辭文例文法（下）」（宋鎮豪）は、卜辭の文章構成（例えば敍辭に始まり命辭の後に占辭・驗辭が記される）、甲骨材料の來源などを記す記事刻辭、甲骨に文字を刻む方法や書式、甲骨文の文法と語法について觸れている。

第八章「甲骨學研究的新發展—西周甲骨分支學科的形成」（王宇信）は、西周時代とされる九カ所の遺跡から出土した甲骨資料（有字甲骨三一二片・字數一〇三三）の全般的概論。一九七七年に陝西省岐山縣鳳雛村で出土した「周原甲骨文」のうち、殷の先王名が記される卜辭、また殷の先王名と「西方伯（後の周文王）」とを併刻した卜辭が殷王室の残したものなのか、周王室の残したものなのかに關する學說もまとめられている。

第九章「前輩學者的成果和經驗、是可資借鑑的文化遺產」（王宇信）は、發見以來百年間に至るまで、甲骨學に貢獻のあった著名な研究者の傳記およびその學說の紹介を中心に扱っている。また、そのような研究者の多くは甲骨文資料の搜索・收集、整理と刊行をも重視し、そして實際に行ったことが記されている。

第十章「學科成果的不斷認識和總結、指導和推動了研究的發展」（王宇信）は、甲骨學の論著目録の紹介、それと甲骨學の發展との關連性、甲骨文の一字索引でもあり用例分類集である島邦男『殷墟卜辭綜類』（一九六七年）の出版、それに範を取った姚孝遂・肖丁『殷墟甲骨刻辭類纂』（一九八九年）の出版によって、眞の科學的な甲骨學の深化

が推し進められたことを論じる。また、甲骨學の研究の總括に關わる書籍や通論性のあるそれについて觸れている。

第十一章から第十四章までは、甲骨文を史資料として用いた研究で論じられた、殷墟甲骨文の時代すなわち殷代後期の社會・歴史・地理・經濟・宗教・氣象・曆法・醫術の各分野の狀況が諸説を交えつつ記されている。内容が多岐にわたるので、以下に章題のみ記し、參考に供しておく。

第十一章「商代社會結構和國家職能研究」（楊升南）。

第十二章「商代社會經濟研究」（楊升南）。

第十三章「商代宗教祭祀及其規律的認識」（常玉芝）。

第十四章「關於商代氣象・曆法與醫學傳統的發掘與研究」（常玉芝）。

最後は第十五章「新世紀甲骨學研究的展望」（王宇信）。あと巻末に、附録一「甲骨學大事記（一八九九—一九九九）」（王宇信輯）と附録二「甲骨文著錄及簡稱」（王宇信輯）が置かれている。（馬越靖史）

**趙誠著『二十世紀金文研究述要』（書海出版社、二〇〇三年）**

本書は五三三頁あり、章構成は次の通りである。なお、各章は數節に分かれる。

第一章 宋代的金文研究

第二章 清代的金文研究

第三章 二〇世紀三〇年代前後的金文研究

第四章 二〇世紀五〇年代前後的金文研究

第五章 二〇世紀七〇年代前後的金文研究

## 第六章 二〇世紀九〇年代前後的金文研究

### 後記

第一章は、金文研究の初期の状況が述べられており、第一節では、宋代以前の金文研究を解説する。漢代から唐代に至る一二〇〇年間、銘文のある青銅器の出土は『漢書』武帝紀や『後漢書』明帝紀等に記載されるものの二〇件に至らず、『漢書』郊祀志下には張敞による金文の釋讀が見られるという。第二節では、宋代の金文研究について解説する。宋代には青銅器を皇帝や高官・貴人・富のある知識人たちが愛好し始め、盜墓の風俗が形成された。その結果、大量の青銅器が出土したが、流失・破壊されたものもあったという。その一方で、銅器銘文の搜集・著録・研究が進み、金石學の形成と發展が進んだ。そのような宋代に書かれた著録の中で、今日に至るまで重要で學術に對して影響の大きかった、呂大臨撰『考古圖』・王黼編纂『宣和博古圖』・薛尚功撰『歷代鐘鼎彝器款識法帖』・王俅撰『嘯堂集古錄』について解説する。また、現在では散失してしまったが、宋代の金文著録に摹本として残されている秦公罇・叔尸鐘等、研究價值のある二〇件の青銅器の簡単な紹介もなされている。第三節では、宋代の金文の釋讀と考證が述べられる。宋代の金文研究では、後漢の許慎著『說文解字』に所收される字形と金文の字形を對照して隸定する方法（對照法）が用いられた。しかし、對照法を用いて金文を釋讀する過程では、金文の寫法と小篆に小異が存在する。宋人はこの小異の寫法に束縛されることなく多くの字を釋してきたが、小異の反映する眞實の字形を仔細に考察しなかつたために、文字を誤ることもあった。また、ある文字

を偏旁に分解してそれぞれを釋し、後にその字を組み合わせる方法（偏旁分析法）も行われた。この方法も、研究の初期段階にあったため、誤りから逃れ難かつたという。さらに、文字の用義が不明な時には、傳世文獻からその義を求めることも行われた。本節では以上の他に、呂大臨撰『考古圖釋文』についても言及がある。

宋代以後、元・明代には金文著録と考釋の專書は見られない。清代に至ると再び研究が進むこととなり、その清代の金文研究を解説するのが第二章である。第一節では清代の金文著録の主要なもの二〇件を簡単に紹介する。また、それらに著録される内容が重要で、文字數も多い金文を擧げている。第二節では、清代の金文の釋讀と考證を解説する。清人は宋人と同じく『說文解字』の字形を比較の對照に用いた。また、銘文の語句と古い典籍の文意・事例を比較する推勘よつて考證を行う推勘法や王國維が提出した「地下の材料」を以て「紙上の材料」を裏付けるといふ二重證據法、その他、偏旁分析法・歴史考證法・對立考察といつた方法も用いられたという。さらに、吳大澂編『說文古籀補』についての解説もある。清代の學者は銘文を通讀する時、考字・釋語・句讀・分段を行い、その中でも分段・句讀を非常に重視しており、このことは宋代の學者に比べて大きな進歩であつたという。晚清の學者の研究では、銅器の鑄造の時代に注意が拂われており、後代の金文研究に影響を與えた點も述べられている。

第三章でいう二〇世紀三〇年代とは、主に一九二〇年代と三〇年代を指す。第一節では、王國維の『宋代金文著録表』『國朝金文著録表』等の研究を解説する。第二節では、一九三〇年代前後に出版された主

要な金文著録が二五件挙げられている。第三節では、郭沫若著『兩周金文辭大系』の解説を行う。第四節は、文字考證と銘文釋讀について、王國維の研究が述べられる。そして、この時代の學者たちの金文の考證・銘文の釋讀を事例を挙げて解説し、金文研究で貢獻の大きかった者は、郭沫若・林義光・王國維の三人であったという。第五節は容庚著『金文編』を解説。第六節は、金文に見える康宮はどのような性質の宗廟であったのか唐蘭と郭沫若の分岐、馱鐘の解釋についての唐蘭と郭沫若の相違が述べられる。さらに、一九三三年夏に安徽省壽縣東鄉朱家集李三孤墳楚王墓から出土した多數の銅器の研究を述べる。

第四章は一九五〇年前後の金文研究を解説する。第一節は銅器の變化とその分類を述べる。ここでは、郭沫若による青銅器の變化の考察、容庚著『商周彝器通考』（一九四一年）の銅器名の考證、郭沫若と容庚それぞれの青銅器の花紋の解説について書かれている。第二節は、一九五〇年代前後の金文著録と新出の青銅器を紹介する。第三節では、陳夢家『西周銅器斷代』と郭沫若の斷代に用いられた銅器の比較がなされ、武王から懿王期の斷代とその解説が行われる。第四節は銘文考釋について述べ、五〇年代前後、文字の考釋は以前のような興盛には及ばず、その他の方面（考字・釋義・句讀・地理等）が重視されたという。第五節は、金文の文字考釋方法を論及して影響が大きい者として王國維・楊樹達二名を上げ、楊樹達の論について、實例を挙げながら解説している。

第五章は一九七〇年前後の金文研究を解説する。第一節は、一九六〇—一九八〇年までの各年に出土した比較的重要な有銘銅器の

紹介を行う。第二節は、一九七六年に陝西省臨潼縣零口公社で發見された利簋について、第三節では、一九七五年に陝西省岐山縣董家村で發見された裘衛諸器（匱盃・五祀衛鼎）と饒匱の銘文について、第四節は、一九六九年に陝西省藍田縣出土の永孟の銘文についての討論が述べられている。第五節は、唐蘭の斷代研究、金文に見える王姜は西周のどの王の後であるのかについての問題、一九七六年一二月に陝西省扶風縣法門莊白大隊白家村より出土した微氏家族銅器群について述べる。第六節は白川靜著『金文通釋』（白鶴美術館、一九六四—一九八四年・同『白川靜著作集別卷 金文通釋』一一七、平凡社、二〇〇四—二〇〇五年所收）が事例を挙げて紹介されている。第七節は、周法高主編・張日昇・徐芷儀・林潔明『金文詁林』（香港中文大學出版、一九七四—一九七七年）、李孝定撰『金文詁林讀後記』（中央研究院歷史語言研究所、一九八二年）、『金文詁林附錄』（香港中文大學出版、一九七七年）、周法高『金文詁林補』（中央研究院歷史語言研究所、一九八二年）の各書について解説を行う。第八節は、この時期の文字考釋・用義探索について、事例を挙げる。

第六章は、一九八〇—二〇〇〇年頃の金文研究について解説する。第一節では、青銅器の銘文の収集について述べ、中國社會科學院考古研究所編『殷周金文集成』（全一八卷、中華書局、一九九六年）の特徴が挙げられている。第二節は、第四次校訂本の容庚編著・張振林・馬國權纂補『金文編』（中華書局、一九八五年）、陳初生編纂・曾憲通審校『金文常用字典』（陝西人民出版社、一九八七年）、戴家祥主編・馬承源副主編・潘悠・王文耀・沃興華編纂『金文大字典』（學林出版社、

一九九五年）・同第二版（學林出版社、一九九九年）といった金文字典を解説。第三節は、周何總編・季旭昇・汪中文主編・周聰俊・陳韵・方炫琛・盧心懋編輯『青銅器銘文檢索』（文史哲出版社、一九九五年）、張亞初『殷周金文集成引得』（中華書局、二〇〇一年）、華東師範大學中國文字研究與應用中心編『金文引得（殷商西周卷）』（廣西教育出版社、二〇〇一年）といった、銘文の索引をまとめた書籍の紹介。第四節は孫稚雛編『金文著錄簡目』（中華書局、一九八一年）、中國社會科學院考古研究所編輯『新出金文分域簡目』（中華書局、一九八三年）、劉昭瑞『宋代著錄商周青銅器銘文箋證』（中山大學出版社、二〇〇〇年）、孫稚雛編著『青銅器論文索引』（中華書局、一九八六年）、吳鎮烽編『金文人名彙編』（中華書局、一九八七年）等の金文に關係する工具書の紹介。第五節は專題の論著を官制・語法・斷代に分け、その代表的論考を擧げる。第六節は、唐蘭『西周青銅器銘文分代史徵』（中華書局、一九八六年）、馬承源主編・陳佩芬・潘建明・陳建敏・濮茅左編撰『商周青銅器銘文選』（全四卷、文物出版社、一九八六—一九九〇年）の解説。第七節はこの時期の文字考釋の狀況、第八節では詞義探索の狀況について述べる。

以上のように、本書は青銅器銘文の考證・研究や文字の研究の歴史について、數多くの事例を擧げての解説がなされている。金文を研究していく上で参考にすべき字書や工具書・研究書、さらには銘文を収集した書籍等についての解説や使用するにあたっての注意點などが書かれており、西周金文を學ぼうとする者にとって有益な情報を提供する。なお、著者は中華書局の編審（編集審定者）である。（三輪健介）

### 何琳儀著『戰國文字通論（訂補）』（江蘇教育出版社、二〇〇三年）

本書の初版は一九八九年に中華書局より刊行され、その後郭店簡・上博簡など新出の資料を加え、修訂増補版となる本書が刊行された。本編は以下の五章よりなる。

第一章「戰國文字的發現和研究」では、本書の題材となる戰國文字について、春秋末年から秦による統一以前の段階で、齊・燕・韓・趙・魏・楚・秦等で使用された古文字を指し、春秋金文と秦・漢の篆書・隸書とをつなぐものと定義する。（ただし本書では侯馬盟書・石鼓文・秦統一後の金文や簡牘なども對比研究の材料として使用している。）そして前漢の孔壁古文から現代の包山簡・郭店簡に至るまで、これまでの戰國文字の發見・研究とその問題點を概述する。

第二章「戰國文字與傳鈔古文」は、地下の材料である出土文字資料に對して、「地上の戰國文字」である傳鈔古文、すなわち『說文解字』の籀文と古文・三體石經の古文・『汗簡』と『古文四聲韻』の古文について概述する。特に『汗簡』と『古文四聲韻』については偽造された文字が含まれている、文字の譌變が甚だしいなどの問題があるが、それでもなお一定の資料的價值を有していると評價する。

第三章「戰國文字分域概述」は、本書の主要部分であり、齊・燕・晉・楚・秦の各地域ごとに、主要な資料・主要な文書形式・頻出する用語や官名・字形の特徴・地名などを紹介する。扱われる書寫材料は、銅器（禮器と量器）・兵器・石器・貨幣・璽印・陶器・簡牘・木器・漆器・縑帛・皮革の一一種類である。書寫材料が異なっても屬する地域が同

じであれば、基本的には字形に共通の特徴が見出せることを前提としており、各地域の文字の特徴を把握することは、戦国文字を研究するうえで最も基礎的な作業であるとする。

第四章「戦国文字形體演變」は、戦国文字の字形の變化の法則について論ずる。前章の戦国文字の分域研究が「同中に異を求めめる」作業であるとすれば、こちらは「異中に同を求めめる」作業である。字形の變化の法則は、簡化（筆畫を減らしたりして簡略化する）・繁化（偏旁を増やす）・異化（文字を反轉・轉倒させたり、文字の一部を異なるパーツと入れ替える）・同化（偏旁の位置や字形の固定化・隸變。秦による六国文字統一の基礎条件となった）の四種にまとめられる。その他、重文符號・標點符號などの特殊符號についても論ずる。

第五章「戦国文字釋讀方法」はこれまでの應用編で、八つの手法によって戦国文字釋讀の實例を提示する。すなわち歴史比較（殷周・秦漢文字との比較）・異域比較（異なる地域の文字との比較）・同域比較（同一地域の文字との比較）・古文比較（傳鈔古文との比較）・諧聲分析（音通を利用した釋讀）・音義相諧（字音・字義による釋讀の兩立）・辭例推勘（その文字が使われている文例による釋讀）・語法分析（虚詞などの語法を利用した釋讀）であり、前四者は字形の考釋、後四者は字形を確定させた後の字音・字義との關係の追求に重點を置いた手法である。ここでは特に通假の濫用を戒め、戦国文字の釋讀においては字形の確認と文意の探求を兩立させることが重要であるとする。

本編の後には、今後の研究課題などについて論じた「餘論」及び「後記」「論著目録」（大陸・港澳・臺灣・國外の四部に分かれる）などが

付載されている。

本書は戦国文字のテキストとして廣く讀まれているが、初版が郭店簡の發表以前に出版されたということもあってか、現在流行の戦国竹簡の釋讀が中心というわけではない。しかしそれでもなお本書は戦国竹簡を研究するうえでの必讀書である。それまで一律に楚系文字による文獻とされてきた郭店簡・上博簡に、最近の研究によりその一部に齊系文字の特徴を具えた篇が含まれていることが指摘されているが、それらの研究は本書の第三章をはじめとする戦国文字の分域研究を基礎としたものである。第四章・第五章の内容が戦国竹簡の釋讀に有用であることは言うまでもない。なお、著者は安徽大學中文系教授、二〇〇七年没。本書と關連の深い著作として、『戦国古文字典・戦国文字聲系』（中華書局、一九九八年）がある。（佐藤信弥）

**劉翔・陳抗・陳初生・董琨編著、李學勤審訂『商周古文字讀本』（語文出版社、一九八九年）**

本書は古文字學の講義用あるいは自習用の教材として編集されたものである。本編は「古文字文選」「古文字概述」「古文字常用字」の三部分から成る。

「古文字文選」は甲骨・金文など各種の出土文字資料の導讀であり、本書の主要部分である。それぞれ資料の拓本（甲骨文の場合は模本）・釋文・注釋から成る。

甲骨文については殷墟甲骨刻辭三八片と周原甲骨刻辭二片が取り上げられている。殷墟刻辭は第一期のものが多く、内容については戦

争・祭祀・天象・田獵に關わるものなどがバランスよく配分されている。各片の末尾に當該片の現代中文譯及び解説が附けられているほか、殷墟刻辭第二片の後に殷王世系表が附載されるなど、關連の基礎知識が得られるよう配慮されている。

金文については殷代・西周期・東周期・秦代の主要な銘文二六件が取り上げられている。それぞれ注釋の冒頭部に出土地・出土年・現藏地などの解説がある。また注釋には當該句の現代中文譯も附けられている。甲骨・金文以外の資料としては石鼓文（車工）と侯馬盟書が取り上げられている。解説等の形式は金文と同じである。

「古文字概述」は古文字學全體に關する通論部分であり、以下の五節から成る。

一「古文字的類別・内容及價值」は、まず甲骨文・金文・陶文・玉石文・簡帛文・璽印文・貨幣文といった出土文字資料の種類とその内容や書式について紹介する。たとえば甲骨文については、刻辭の種類（卜辭・家譜刻辭・曆譜刻辭など）、占卜の内容（祖先や鬼神の祭祀・方國征伐・風雨天象・旬夕の吉凶など）、卜辭の構成（署辭・兆辭・敘辭・命辭・占辭・驗辭）、書式（左右對貞の別や、上下に卜辭が並んでいる場合は一番下の卜辭から讀んでいくといったこと）などの基礎事項が解説されている。ついで王國維が甲骨文と『史記』股本紀に見える殷王の世系を比較したことなど、古代史學や文字學研究における出土文字資料の價值について述べる。

二「古文字考釋的方法問題」は、時代の進展による古文字の字形の變化、傳世文獻に見える文例を参照して出土文字資料を釋讀する手法、

文字の音通假借を利用した釋讀法などについて解説する。

三「古文字形體的發展規律」は、古文字の簡化（字形の簡略化）と繁化（筆畫・偏旁などの追加による字形の複雑化）、循化（字形の規律的な變化）と譌化（字形の譌誤による變化）、分化と整化（字形の統一）について解説する。

四「甲骨文中の幾種語法現象」は、主語や目的語の位置が變化する場合といった語順の問題、雙賓語句（直接目的語と間接目的語の二つの目的語が存在する文）や兼語句（使役文など、前の動詞の目的語が後の動詞の主語となるもの）の構造など、甲骨文の文法事項について解説する。

五「金文語法的幾個問題」は、甲骨文の文法と比較のうえで金文の文法の發展を解説している。たとえば「之」「其」「厥」のような從屬を示す介詞（前置詞）や、「克」「敢」「能」「義（宜）」のような助動詞の出現など、定語（連體修飾語）・狀語（連用修飾語）の發展、「以」字によって直接目的語を動詞の前に引き出す處置式構文の出現などが取り上げられている。

最後の「古文字常用字」は、二・三二件の古文字の簡易字書である。それぞれ發音（現代音（拼音））と反切、上古音の韻部・聲紐・聲調。反切については『說文解字』大徐本の音注など、上古音については唐作藩『上古音手冊』に據っている、析形（字形の字源解説）、釋義から成る。また卷末に拼音・筆畫索引がある。

たとえば一七九番「衣」字の場合は以下のようになる。○發音：「yi」、於稀の切、微部・影紐・平聲。○析形：甲骨・金文での字形を擧げ、

林義光の「領襟袖の形を象る」(衣服の襟や袖の形をかたどる)という字源解説を紹介する。○釋義…(一)上衣。(二)祭祀名(すなわち傳世文獻に見える殷祭)。(三)朝代名、すなわち商(殷)。(四)大量、全部。(五)「卒」と同じ、完畢(終わるの意)。各項目でそれぞれ甲骨・金文や傳世文獻での用例を挙げる。このうち(二)(三)(四)は「殷」字の通假字としての用法である。他の字でも通假字としての用法には同様に注意が拂われている。また七七番「廷」字の項で金文に見える「中廷」「不廷」の語を取り扱うなど、單字に留まらず熟語も取り上げられている。

本書の初版はちょうど四半世紀前となり、本文も手書きの原稿をそのまま印刷したものであるが、今回入手した版では奥付に「二〇一一年九月第七次印刷」とあり、古文字學の教材として長年読み継がれていることがわかる。類書と比較して特に文法事項の解説に紙幅が割かれており、自分で實際に出土文字資料を読むということに重點が置かれたつくりとなっている。(佐藤信弥)

### 高明著『中國古文字學通論』(北京大學出版社、一九九六年)

序文によれば、本書は作者が北京大學考古系で講義したものの一部を改編したものである。原來の「古文字學講義」は三部分になっていたが、第二部分は『古文字類編』(中華書局、一九八〇年。増訂本は二〇〇八年)として出版し、本書は第一部分と第三部分を大幅に改編したものであると云う(A四判で目次、序論を除いて本文四七八頁)。本書は上編と下編に分かれ、その章立ては以下の如し。

#### 上編 古文字學基礎

##### 第一章 漢字研究的歷史梗概

###### 第一節 先秦時期的漢字研究

###### 第二節 秦始皇時期的“書同文字”

###### 第三節 兩漢時期的字書與辭書

###### 第四節 三國至隋唐對漢字的研究

###### 第五節 兩宋時期對漢字研究的貢獻

###### 第六節 元明時期關於漢字的研究

###### 第七節 清代古文字學的建立和發展

##### 第二章 漢字的起源和發展

###### 第一節 漢字的起源

###### 第二節 漢字的發展

##### 第三章 漢字的古形

###### 第一節 研究漢字形體的傳統理論——“六書”

###### 第二節 古文字的形旁及其變化

###### 第三節 意義相近的形旁互爲通用

###### 第四節 漢字形體的簡化與規範化

###### 第五節 古文字的考釋方法

##### 第四章 漢字的古音

###### 第一節 語音學常識

###### 第二節 中古音韻

###### 第三節 上古音韻

##### 第五章 漢字的古義

## 第一節 訓詁的意義和源流

### 第二節 訓詁學的主要方法

#### 第三節 訓詁學要籍簡介

## 下編 古文字學專題

### 第六章 商周時期的甲骨文

#### 第一節 商代甲骨文

#### 第二節 周代甲骨文

### 第七章 商周時期的銅器銘文

#### 第一節 商周時期的銅器和銅器銘文

#### 第二節 商周時期銅器銘文研究概況

#### 第三節 周代銅器銘文斷代和分區

#### 第四節 商周時期銅器銘文選讀

### 第八章 戰國古文字資料綜述

#### 第一節 載書

#### 第二節 戰國兵器刻辭

#### 第三節 戰國璽印

## 結束語

上編は古文字學の基礎について述べた部分である。

第一章……漢字研究の歴史を時代別に概観し、重要な書籍について  
は詳述している。この章で詳細な説明がされている書籍、すなわち『爾  
雅』、孔鮒『小爾雅』、劉熙『釋名』、揚雄『方言』（正式名…『輶軒使  
者絶代語釋別方言』）、史游『急就篇』、許慎『說文解字』（徐鉉『說文  
解字』（大徐本）、徐階『說文繫傳』（小徐本）、呂忱『字林』（任大椿『字

林考逸』）、顧野王『玉篇』（陳彭年等重修『大廣益會玉篇』）、張揖『廣  
雅』（後に錢大昭『廣雅義疏』、王念孫『廣雅疏證』有り）、曹憲『博  
雅音』、顏元孫『干祿字書』、張參『五經文字』、玄度『九經字樣』、洪  
適『隸釋』、『續隸』、鄭樵『六書略』、王洙等編『類書』（舊題司馬光撰）、  
僧行均『龍龕手鑑』、羅願『爾雅翼』、陳彭年『廣韻』（『大宋重修廣韻』）、  
丁度等編『集韻』、戴侗『六書故』、趙宦光『說文長箋』、梅膺祚『字彙』、  
張自烈『正字通』、顧炎武『音學五書』、戴震『聲韻考』、『聲類表』、吳  
大澂『說文古籀補』（後に丁佛言『說文古籀補補』、強運開『說文古籀  
三補』有り）、孫詒讓『古籀拾遺』、『古籀餘論』、王國維『觀堂集林』  
などは古文字研究の基本文献なので、此の學を志す者は取り揃える必  
要がある。本章で取り上げている甲骨文・金文關係の書籍は多すぎる  
ので、個々の書名は挙げないが、やはり必攜の書籍である。本章では  
羅振玉・王國維以後の書籍は取り上げていないが、これ以後の研究の  
方が進展していて遙かに重要である。また甲骨文・金文の資料の集成  
化と研究も一九七〇年代以後の方がめざましい。だから七〇年代以後  
の卜辭・金文の寫眞・拓本集・釋解、一端を挙げれば『甲骨文合集』、『甲  
骨文合集補編』、『甲骨文詁林』、『金文詁林』、『殷墟甲骨刻辭類纂』、『甲  
骨文合集補編』、『殷周金文集成（修訂增補本）』などを積極的に揃えるべ  
きだろう。

第二章……第一節は一〜四からなっていて、一では漢字と漢語の關  
係、二では漢字の起源傳説、三では新石器時代の陶器符號について述  
べる。四では仰韶文化の陶器花紋と甲骨文・金文の象形文字の比較か  
ら漢字は原始圖畫に起源したことを述べる。第二節の一では象形字が

ら會意字（象意字）への發展と假借の發生、次いで形符の發生と形聲字の成立について説明している。二では漢語と漢字の特徴と問題点を指摘している。

第三章……第一節は漢字の形體についての傳統的理論を説明している。次いで六書説を指示・象形・會意・形聲・轉注・假借の順で詳細に説明している。この部分では形聲における亦聲説・省聲説・復形復聲説の説明と、轉注とは何かについての三種の説についての説明が重要である。第二節は形旁とその變化について百十二種の形旁（人字形旁・鬼字形旁）を甲骨文・金文・戰國文字・小篆・隸書の順に表にし、その變化を比較したもので、本書の白眉ともいえるべき部分である。七三頁に及ぶ膨大な表と説明であるが、修得できれば、古文字の隸定（原字を隸書・楷書に直すこと）がかなり可能になるだろう。第三節は意義の近い形旁（人と女、首と頁など）が通用していることを三二例の表によって示している。これも必須の知識である。第四節の二では形體の簡化、二では形體の規範化を簡體の字と繁體の字を表示して説明している。これもまた重要である。第五節は古文字の解釋法として因襲比較法、辭例推勘法、偏旁分析法、禮俗制度による釋字を説明している。

第四章……漢字の古音について説明している。第一節は音韻學の常識として、一では元音と補音、二では送氣音と不送氣音について、三では唇音・齒音・舌音・牙音・喉音・半舌音・半齒音という傳統的名稱と現代音韻學での名稱の關係について、四では聲母と韻母、五では聲調について説明している。第二節は中古音韻についての説明で、一

では反切と雙聲疊韻の説明、三では中古の韻部として『廣韻』の分類を挙げ、次いでその後の戴震・王國維の研究について述べる。四では『韻鏡』における等韻と四呼の分類の説明をしている。第三節の一は上古の聲紐の考定について述べたもので、まず錢大昕の上古には輕唇音・舌上音が無く、舌音が多く、影母・喻母・曉母・匣母は雙聲であるという極めて重要な指摘を紹介し、次いで章炳麟の娘母・日母は泥母に歸すという説と曾運乾の喻母三等韻は匣母に歸し、喻母四等韻は定母に歸すという説を紹介し、最後にそれらを吸収した王力の上古聲紐の六類三二母を示している。二は上古の韻部について説明したもので、王力二九部説の後に、顧炎武一〇部説、段玉裁一七部説、孔廣森一八部説、江有誥二一部説、江永一三部説、黃侃二八部説を挙げ、次いで王力の分類にもとづく諧聲表を載せる。第三節の一と二は現代中國における聲母・韻母の分類が王力説を基本にしていることを知った上で讀むべきである。現在、個々の漢字の古音を早引きするものとしては、この王力説にもとづく郭錫良『漢語古音手冊』（増訂本、商務印書館、二〇一〇年）が便利なので、購入を勧める。三では對轉・旁轉と聲調、四では上古音韻學研究の成果の應用について説明している。これらのうち對轉と旁轉についての知識は必要である。

第五章……第一節の二では訓詁の意義、二では訓詁の源流について説明する。第二節の一では形訓例、二では義訓例、三では以共名訓別名例、四では以雅言訓方言例を説明している。第三節は『爾雅』『小爾雅』『廣雅』『釋名』『方言』『說文解字』『急就篇』について、その體例を挙げたうえで、内容を詳説している。

下編は甲骨文・金文・戰國文字についての演習になっている。

第六章……第一節の一では商代甲骨文の發見の經過に續けて甲骨文の著録を一一六種、考釋關係の著作を二三種記載し、その内容を説明する。二では甲骨の整治、鑽鑿、占卜、刻辭、行款について詳述している。三では甲骨文の語法（文法）について、四では商代甲骨文の分期を世系、稱謂、貞人、貞卜事類、文例と句型、字形と書法を基本に述べる。分期については董作賓説と陳夢家説を擧げているが、他はほぼ董作賓説を踏襲している。五は第一期から第五期までの甲骨文を演習のように記述したもので、拓本を用い、隸定と注釋を附して説明している。方神風神卜辭、干支表卜辭、田獵卜辭など商代の必要知識を得るのに的確な卜辭が選ばれていて、大變有益である。第二節は周代の甲骨文についての演習だが、もとの甲骨文が小細で見にくいいため摹本を多用し、読みやすい。

第七章……第一節の一では商周時代の青銅器の器型を圖を用いて説明し、二では商周時代の青銅器銘文（金文）の特徴と文獻との關わりについて概説する。第二節は商周時代の金文研究の概況についての説明で、一では資料の搜集と整理について述べ、二では孫詒讓・王國維・郭沫若・唐蘭・楊樹達・于省吾・容庚・商承祚・徐中舒・吳其昌・陳夢家・張政烺・羅福頤・孫海波の金文研究の成果について述べる。第三節の一では西周金文の分期について説明する。本節では西周諸王の在位年數と標準器について説明しているが、それらについては本書より後に出た夏商周斷代工程專家組『夏商周斷代工程 1996-2000 年階段成果報告（簡本）』（世界圖書出版公司、二〇〇〇年）を読むことを勸

める。二では東周青銅器の銘文の地域的な特徴について概説している。第四節は金文の演習になっている。一では商代金文、二では西周金文、三では春秋戰國金文を扱っている。いずれも著名な銘文で概観するに適している。

第八章……本章は戰國古文字について概説している。第一節は載書（盟書）についての概説をした後、一では侯馬載書の種類・内容・出土狀況について、二では侯馬載書の研究を紹介し、三では宗盟類、自誓于君所類、納室類の順で摹本・隸定・注釋を附して解説している。第二節は戰國兵器の刻辭（金文）について、韓、趙、魏、秦、燕、齊の順で拓本・摹本・隸定・注釋を附して解説している。第三節は古璽（璽印）について、一では起源、二では搜集と著録、三では形式と紐制について述べ、三では戰國の齊、楚、燕、三晉の官印と戰國の私印について拓本・隸定・注釋を附して解説している。

本書はもとは講義用ノートであったとしているが、以上に見てきたように高度な内容が多く、一般の入門書の範疇を遙かに超えている。よって初心者向けというよりは研究者へ足を踏み込む者への高度な解説書といふべきである。（木村秀海）

許進雄著『中國古代社會—文字與人類學的透視』（臺灣商務印書館、二〇一三年九月）

著者は臺灣の出身であり、臺灣大學で甲骨學と中國文字學を修めた後、一九六八年よりカナダのトロントにあるロイヤルオンタリオ博物館 (Royal Ontario Museum) に甲骨の整理の爲に招かれ、研究職とし

て勤め、一九九六年に退休した。その間、半工半讀の生活を送り、トロント大學で一九七四年に博士の學位を取り、一九七七年より同大學で、文字學・經學史・中國古代社會等の講義を受け持った。この書はその時の *The Written Word in Ancient China* という科目の講義プリントをまとめたものである。

今までに六度に渡って内容の改定を重ねてきている。最初は、トロント大學の同僚である Alfred Ward との共著として、『*Ancient Chinese Society*』と題した英文版。一九八四年にアメリカの商務印書館から出版された。第二は、中文版として、一九八八年に臺灣商務印書館からの出版。これ以降は單著である。この本は二度わたって、韓國語に翻譯されている。第三は、その中文修訂版で、一九九五年、同じく臺灣商務印書館からの出版。第四は英文版、『*The Written Word in Ancient China*』と題し、一九九六年、香港の Vincent Printing からの出版。第五は、二〇〇八年、中國人民大學出版の簡體字中文版。第六版が本書にあたり、奥付には臺灣商務印書館として三版と記す。

内容は文字學・考古學・人類學・民俗學・歴史學にまたがり、一言でいうなら、およそ上古から漢代に及ぶ古代中國の百科全書である。日常の生活に關わる四二一個の漢字を取り上げ、文獻資料や考古的遺物を参照して、古代中國の人々の社會と文化を探索している。全體を二〇章に分けて、

- 一、中國の文字體系與書寫工具、二、中國古史的傳統、三、漁勞與氣候、四、畜牧、五、農業的發展與中華民族的形成、六、糧食作物、七、金屬、八、工藝、九、食物、一〇、衣服、一一、居住、一二、

交通、一三、生命循環、一四、娛樂活動、一五、商業活動、一六、病疾與醫藥、一七、戰爭與刑法、一八、祭祀與迷信、一九、天文、二〇、方向與四靈、

と配列し、各章の下に合計二八三の細目が並ぶ。以前の第五版までは目次にこの細目が載っていなかったため、内容を俯瞰することも適わず、讀みたい頁を探すのにも甚だ不便であった。この細目が目次についたので、ようやく使いやすくなった。圖書館に藏されているのはまだ舊版がほとんどであろう。最新版の購入を勧める。

配列順に少し疑問がある。六「糧食作物」と九「食物」とが離れており、この二者の間に「金屬」と「工藝」の二項目が挟まっている。六と九はそれぞれ穀物と飲食であるので、連続した配列が望ましい。また二〇「方向與四靈」も、一八「祭祀與迷信」の後に續けるべきであろう。なお一三「生命循環」とは、出産・家族・葬送などという項目である。

多くの圖版が挿入され、理解の助けとなっている。また取り上げた漢字は、甲骨・金文・小篆・隸書と現代の楷書の五體をそれぞれ表に示し、その變遷がよく知れる。これは高明『古文字類篇』（中華書局、一九八〇年）と、徐中舒『秦漢魏晉篆隸字形表』（四川辭書出版社、一九八五年）に據る。ただし索引はないので字書的な使い方には向かない。さらに卷末の「引用著作簡稱表」は有益な文獻目錄となる。

（村上幸造）